

保育者が伝える「保育実践論」

田中三保子

「保育実践論」という授業

私は今、大学で保育関連の授業をしています。その中に「保育実践論」という家庭科教員免許取得のための科目があります。ほかの科目と違って、この授業の受講生の中で保育に関心のある人はいつも少数派です。子どもに興味があっても、乳幼児と身近に触れ合う機会はあまりないようで、中には、子どもが嫌い、怖いという人もいます。

中学校や高校の家庭科では「保育」は選択科目だったようで、受けたという人でも覚えているのは、「子どもの発達段階（〇か月にはどうなる）を

教わった」「子どもの喜びそうな玩具を考えて作った（実際にそれで子どもと遊ぶことはなかった）」「保育所に行って子どもたちと遊んだ」という答えがほとんどです。中高生と言えば思春期真っただ中、自分のことで手いっぱいな時期ですから、実際に触れ合う経験のないままに乳幼児の話だけ聞いても、子どもや保育に関心をもつには至らないのはいでしょうか。

家庭科教諭への願い

近年、「子どもたちが、言うことを聞かないから」あるいは「しつけのため」と称して、虐待され

たというニュースに頻繁に接するようになりまし
た。そういうことを聞いたときに、私は子どもが受け
た心身の痛みを思い、大人はもつと子どもについて
理解を深めてほしいと切に願ってしまいます。自我
の発達過程でのわがままや強情は子どもが通るべ
き道であり、そこから他者との調和のとれた関係が
はぐくまれていくのです。子どもには子どもの育ち
方がある、幼くとも、もう、その子自身の人生を
歩んでいるのです。

家庭科で「保育」を教える先生には、ぜひとも、
乳幼児の外見上の発達だけではなく、精神的な発達
の過程（個人差も大きい）も理解して、「保育」を
中高生に伝えてほしいと願います。そして彼らが、
その子その子らしく生きることを支え、それを喜
べる大人になってほしいと願います。幼いころから
大人の期待を一身に背負い、その期待に応えようと
頑張っている子どもたちを、「よい子」と見なす大
人にはなつてほしくないのです。

「保育」を、言葉を主な伝達手段にして相手に伝え
るのはとても難しいと、私は自分の保育経験から感
じます。家庭科の先生には、子どもが育つこと子ど
もを育てることを、知識だけでなく感覚的な部分も
含めてわかつてほしいのです。その感覚が根底にあ
れば、単に知識を中高生に伝えるだけの授業にはな
らないでしょう。

私の「保育実践論」

保育にあまり関心のない学生にも、実感を伴うよ
うな保育の伝え方をするにはどうすればよいので
しょうか。

私がかつて用いている方法の一つは、教育用ビデオ教材
の活用です。しかし、ビデオ映像は子どもの実態に
間接的ながら触れられる点では有用ですが、部分を
切り取りつなぎ合わせたものであるため、全体の中
での子どもや遊びのつながりは見えにくくなります。
しかも、制作者側の視点でまとめられています

ので、一回見ただけでは、そこに浮かび上がるストーリーに沿ったとらえ方になりがちです。そこで、同じビデオを続けてまた見てみます。ビデオの流れに沿いながらも、途中で止めたり巻き戻したりして、細かいところにも注意を払いながら見ることを繰り返します。そして、子どもが折々に見せるちよつとしたしぐさや表情、発せられる言葉やそのトーンなどから、子どもの思いを推察していきま

す。またそこを基点にして、保育者の行為の意味を考えます。学生に意見を求め一緒に考えていきたいのですが、専攻学科も学年も異なる学生が集まるクラスでは、なかなか意見が出てきません。今のところは、私が説明することが多くなっています。

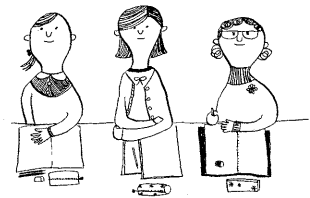
保育は、保育者と子どもや子ども同士の関係の中で、日々営まれていく行為の連続から成り立っています。一部分を取り出しても、当事者でなければ読み取りが困難なことも多くあります。しかし、私としてはそれを承知の上で、一つの解釈として学生に提

示しています。「ビデオの中の子どもの心情や先生の行動を考え、疑問をもちながら解説を聞くことで、たくさんのがわがり納得できた。解説の後再びビデオを見ることで、より理解でき、より印象に残った」と、ある学生はつぶつぶてくれました。

「実践論」としてのもう一つの教材は、保育者が書いた記録です。たとえば、子どもが集団生活から見れば迷惑なことをしたとき、保育者がそれをどうとらえ、どう対応したかを記録から読み解く作業をします。そして、「しかる」「あやまらせる」などの保育者がとる行動と、子どもへの影響について考え

ます。

「私がしかられるのが嫌いなのは、自分を否定されるのがいやだったんだと気づいた」「覚えている範囲で私はいろいろな先生に怒られてきたので、声を



荒げずに『行為』を注意してくれた先生がいたらよかったですのにも思った」「集団生活のルールなどを経験なしに教え込む場所ではないというのは今までの幼稚園観を覆すようなことだった。ルールを身につけることも大事だけれど、どのようにとというプロセスがとても大切。自分で納得していけないと思うのと、いけないと言われて守るのは大違い。納得するという過程を経ることの大切さを感じた」など、自分の体験を踏まえた感想がいろいろ出ます。

そしてもう一つ、一回だけですが、附属幼稚園見学は、学生の保育のとらえ方に大きな影響をもたらします。実際の保育現場では、映像で見たような場面がそこかしこで同時進行していきますから、子どものもつパワー、保育者の素早く的確な動きを目の当たりにして、圧倒されたり驚いたり納得したり、学生それぞれに強い印象を残すようです。「幼稚園に行ってみたら子どもが欲しくなった」という学生もいます。もっと子どもと触れ合いたかったという

学生も、観察だからこそ子ども同士の自然なかかわり合いや先生の対応を客観的に見ることができたという学生もいます。

「感想」を書くこと

事例について考察したときには、授業の終了前に感想を書いてもらいます。目的の一つは、学生が「何となくわかった」で終わらないように、自分なりに学び取ったことを自覚し意識化してもらうためです。書くためには、自分の感覚に耳を傾け、ふざわしい言葉を探らなければなりません。その過程が学びをその人自身のものにしてくれると思うからです。もう一つの目的は、伝えたかったことが学生一人ひとりにどのように受け止められたかを、私が知りたいからです。保育者であった私には自明のこととして説明不足の部分があるかもしれませんが、私の意図とは違って受け取られていることもあるでしょう。それをきちんと把握し次回以降の授業に生

かしたいと思います。

「感想」を読んでいるとき、私はその学生と対話をしているような気持ちになります。思わずうなずいたり、「えーっ」と声が出てしまったり。でもその場で私の考えを返すことはできませんから、次回の授業の最初に、いくつかを紹介したり補足説明をしたり、疑問質問に私なりに答えたり、感想用紙を通しての対話が続くようにしています。「毎回私たちの感想に対して丁寧に解答してくださるので、私の書くものもだんだん長くなってしまいました」という感想には思わず笑ってしまいました。

「感想」を読み上げるときには、名前は明かしていません。提出してもら回数が増えるにつれて、自分の負の体験に照らし合わせた感想が出てくるようになります。私は自分の体験から、保育を考えることは自分のありようを見つめることにつながると感じています。授業を重ねて、学生も私と本音の対話をしてくれるようになったのかもしれない。もし

そうだとすれば、私への信頼を裏切ってはいけないと思うのです。

授業の振り返りから見る

「保育」のとらえの変化

授業を終えてのレポートの中で、受講前と後との「保育」のとらえ方の変化について書いてもらいます。授業の積み重ねから、自分の学びをもう一度反すうし納得して自分のものにしてもらいたいからです。表現の仕方はいろいろですが、ほとんどの学生が、「保育」を、子どもを主体にしてとらえるようになった様子がかがえます。以下に、ある学生の書いたものを紹介します。

「前は、保育は子どもに何かを教えるようにすることと思っていた。今、保育とは、子どもの成長をサポートすること、子どもが卒園した後も自己実現に向かって努力していくことができ、自己表現ができるよう手助けすること、与えられたものをう

まくこなすことを教えるわけではなく、やりたいこととは何か、それを実行するにはどうすればいいのかを自分で考える能力を身につけてもらうこと、大人を信頼できるようにすることと考える。そのために保育者は、それぞれの子どもをよく見て、どんな手助けが必要かを見極め、実行していくこと。子どもはそれぞれが違うから、全体で『子ども』としてくくってはいけない。行動の裏にどんな感情があったのかを考えたり、普段どんなふう遊んでいるのか観察したりすることが重要。子どもに大人の価値観ややり方を押しつけたりせずに子どもの主体性を大切にいかかわり合っていく。その中で信頼関係を形成していくことができればサポートもしやすくなる」

学生のひとつが、いわゆる一斉保育を受けてきているので、保育を受ける子どもの立場に立ちつつ保育する側の視点も理解して、子ども主体の保育を受け入れていくのは、そうたやすいことではないと思います。自分の受けてきた保育を、ひいては自分

自身を否定することにつながりかねませんから。

最後に授業全体の感想から紹介します。

「この授業を受けたことで、＼子どもは欲しいけど子育てはいや＼が、＼子育てもしてみたい＼に変わったことは、自分の中で本当に大きかった」

「この授業を通して私が大切だと思ったことは、友達や親子関係などさまざまな人間関係に通じるものであると思う。その場しのぎで調子を合わせるのではなく、本当によいと思われるかわりをするほうがよい。相手の気持ちを考え理解しようとする姿勢をもつことが大切」

「とても楽しい授業だった。これは、先生が園児たち一人ひとりを大切にしていたのと同じように、大学生である私たちの考えや思いもそれぞれ大切にしたいのでそれに応えてくださったからだと思う」

手前味噌のようで恐縮ですが、私なりの授業への思いが通じたようで大変うれしく思いました。

(元幼稚園教諭)